ることでもある。昭和五十年（一九七五）五月、熊野筆が「伝統的工芸品産業」に指定され、一七人の伝統工芸士が生まれた。その人々は、すべて男性であり、高度の生産技術を有していた。このことは、第二次世界大戦後においても、高価格品の生産が、熊野町で行われていたことを明らかに示している。前述のように、低価格品が、現在もなお大きな生産量を占めている中で、高価格品の生産が相当程度行われているという現実は注目しなければならない。かつて男性中心であった伝統工芸士の中に、最近では女性が認定されつつある。このことも、熊野筆の高級化傾向を看取させる事実であるといってよかろう。

第二次世界大戦前における各毛筆問屋には、女性職人とともに、「ジョーモノシ（上物師）」といわれる男性職人が存した。この上物師こそが伝統工芸士の前身であった。この人々は、高価格品の生産に従事するとともに、筆造り技術における師匠格の人々でもあった。これらの人々の努力によって、毛筆の品質の向上と、他産地の製品と比較してみると安価であるという熊野筆の特色がえられたという事実を忘れてはならないであろう。

いわゆる上物師と呼ばれた人々の、昭和初年前後ごろにおける毛筆問屋での地位は、ひじょうに高いものであった。各問屋では、問屋の主人に次ぐ地位を与えられ、問屋の主人と血縁等の関係はなくとも、主人の兄弟と同様に処遇されていた。これほどの処遇が与えられたのも、各問屋系列の職人育成ということと別ではなかったと考えられる。いずれにしても、上物師の存在が第二次世界大戦までの、職人育成の原動力であった。

伝統工芸士の制度は、伝統工芸士の人々を各問屋制から解放させたという点で、有益であった。しかし、個人としての独立性を強めるとともに、熊野筆製作職人の育成に徐々に問題を生じせしめることにもなりつつある。と同時に、製品の安価で良質という特性をも失わせることになりつつあることは、今後解決すべき問題として残

るであろう。

地理的条件と生産基盤　熊野町という山間の一寒村に、何故毛筆産業が形成され発展してきたのか、この問いは、以上の各項目についての分析を行ってみても、なお不明なところが多い。しかし、山間の閉鎖的な一地域である熊野町に、この産業が根づき始めた時期に、もう一度思いを回らしてみると、注目すべき一事がある。それは、農村ということ、副業を必要としたということ以上の問題である。幕末期に、農村であり副業を必要とした村々が熊野町以外でも全国各地に存在したことは、想像にかたくない。

熊野町は、広島市という政治の中心地から約二〇キロの近郊である。歩いて半日の行程である。一方、山間の盆地という地域的閉塞性も同時に存在する。このことは、熊野という集落それ自身にとって必要な情報は、日を経ずして流入しうることを意味している。他方、不必要な情報を排除しうるという地理的条件をもっているということでもある。また、山間の盆地という生活共同体を形成しやすい条件は、熊野という地域的同質性、求心性を保持しやすかったということをも忘れてはならないであろう。筆造りは、早急に普及し、同質的製品を保持するうえで、誠に好都合でさえあった。これが熊野筆を特色づける一つの条件であったのである。

筆の軽量、短小性と製品価格　筆は、軽量な製品である。一〇〇対の年生筆も、横一〇センチ、縦三〇センチ、深さ一五センチほどの箱に、じゅうぶん入れうる。そのため、販売のために、消費地に持参していくという点で、たいへん有利な産物であった。

各消費地に出向くにも、トランクに見本一式といささかの販売しうる製品をしまいこんでおくだけでじゅうぶんであった。あるいは、まとまった注文を受けても、小包便で行商、販売に出向いている者の定宿に送付することも容易であったし、注文主に直接、そしてかなりの短期間のうちに送り届けることもできる製品であるという

特色をもっていた。明治期には、天秤棒に荷負って行商に出かけたという。明治末期からは、トランクに製品を入れて行商したという。製品が軽量であるということ、さらにそれがかなりの金額のものであるということが、これらの販売方法を容易にした。また、熊野町という山間地の地理的条件が販売上の隘路とならなかったのも、毛筆という製品の特色によったのである。

軽くて、小さい製品、と同時に、それは相当に高額な製品でもある。毛筆は、その点で、販売品として、明治以降において、誠に近代的な性格をもつ商品であった。そして、生産そのことが熊野という地理的条件とうまく適合する条件をも所有していた。熊野筆が薄利多売という方法で販売される製品であるという、全国に通じる特色をもちえたのも、以上のような理由にあったと考えられる。

行商という販売方法、あるいは大都会に存する大問屋を通しての販売方法は、熊野筆のブランド性の喪失をも意味している。自社ブランドでの販売が行われないということも、熊野筆の生産単価の低さともなっている。これも、しかしながら、熊野筆の一つの特色といって間違いないであろう。今後の一つの課題がここに認められるわけである。

六　熊野筆の将来とその展望

筆記用具と教育課程

太平洋戦争後の筆に対する需要減、昭和二十二年（一九四七）の学制改革に伴う小学校における毛筆習字の廃止は、毛筆産業に多大の苦痛を与えた。ところが、昭和二十六年（一九五一）四月、再び小学校の教育課程において習字（書写）教育が始められて以後、筆に対する需要の増加

は、熊野の毛筆生産業にたずさわる人々に、大きな経済的恩恵を与えてきたことは、これまでの記述に見られるとおりである。昭和二十六年以降の需要は、一言でいえば、筆に、小学校教育によって生起された筆記用具としての性格が与えられた事情を強く反映している結果であるということができる。筆の将来を展望するとき、今後とも、果たしてこのような性格が持続できるであろうか。万年筆、鉛筆は、ボールペン、シャープペンシルに筆記用具としての地位を譲りつつある。さらに、今後は事務機器の発達によって、ワードプロセッサー等の記録用機器が発達してくることはいうまでもないところである。筆の筆記、記録用具としての需給は、今後縮小するとも、増大はしないであろうと予測される。

義務教育諸学校における習字の学習は、文字の筆順指導の方法として採用されている。筆順指導は毛筆によるという必然性が、いつまで保持されるものであるかということも、じゅうぶんに考えられなくてはならない。硬筆書道の声も高まってきている。一方、小学生などの鉛筆保持の方法の未修得ということも、大きな社会的関心を呼ぶようになってきている。毛筆よりも硬筆指導こそ緊急の課題であるとされる日の来ることも予想されないではない。

毛筆離れ傾向の強まり

義務教育諸学校における習字指導が行われている限り、毛筆の需要は、一定量は保証される。しかし、習字指導が太平洋戦争直後のように行われなくなる可能性は、常に存在しているということを、筆事業に参与している人々は、配慮しておかなくてはならない。

昭和六十二年（一九八七）三月一日付けの『朝日新聞』のコラム「今日の問題」における「楽しい学び」と題する一文には、現在における世間の毛筆離れの状況、なかでも青年層に認められるその傾向の強さが指摘されている。また、一方で、書道教室に主婦や若い婦人が通っている状況をも描いている。この二つの点が、熊野筆の将

来を展望するに当たっての重要な視点ではなかろうかと考える。そのため、いささか長いが、その記事の全文を引用してみることにする。

東京の私立女子高の先生に聞いた話だと、毎年、卒業期になると、学校に山のように残るものが二つある。運動着のジャージーと、書道の道具セットだそうだ。

どちらも学校に置いておいて使うことになっているものを、卒業しても持って帰らない子が多いわけである。物余り時代、使い捨て時代に育つ世代のことだから、いまさら驚くには当たらないかもしれない。

ただ、ジャージーのほうは別に着るものを買うだろうが、書道の道具を新たに買いととのえる子は、あまりいないのではないか。とすると、筆で字を書くという行為そのものと、縁を切ってしまうことを意味する。

女性から水茎の跡うるわしい手紙をもらう、などという機会は次第になくなってゆくのだろう。自分の金くぎ流を棚に上げて、勝手にそんなふうに思っていたら、必ずしもそうは言えないと教えられた。

いま東京・銀座のギャラリーで、手紙・はがきばかりの書道展が開かれている。女流書家の国貞馨竹（けいちく）さんとお弟子さんたちが、実際にだれかにあてて出すつもりで書いた作品の、ちょっと変わった展展会である。

これが、なかなかのにぎわいで、普通の書展とは違ったはなやかな女性の鑑賞者を集めている。国貞さんによると、最近、かな文字を習う女性が増えているそうで、主婦層ばかりでなく、勤め帰りに教室に寄ってけいこを楽しんでゆく感じのＯＬなど、若い人も少なくないという。

なるほど、出品作を見ても、何色かの紙を美しく組み合わせた「王朝継ぎ紙を使い、字のほかに俳画を添えたもの」とか、筆書きのクリスマスカードといった、遊び感覚のあふれたものが並んでいる。

確かに、こういう書道なら、楽しみとしてやれるだろう。三年ぐらいけいこすれば、人に出して恥ずかしくない字が書けると聞くと、あらためて高校に残される書道道具の山が惜しい気がしてくる。

せっかく三年間やらせるのだから、この学びの楽しさを、学校でも味わわせることができないものか。書道に限ったこ

第四節　熊野筆の特色とこれから

とではないけれども。

この一文の結びに、高校における書道教育の問題点も指摘してある。このことが書道離れの一端となっているといえるかもしれない。しかし、問題がそのことだけにあるのでないことをも暗示している。すなわち、現代の書道離れ傾向がいかに強いかということを述べているのである。

一方、この一文は、女性の書道離れと、書道けいこ人口の増加傾向とについて述べているが、書道離れの傾向は、女性にのみ限られるものではない。共学高校の傾向を見ても、男女とも同一の傾向が認められる。ただ、男性の書道塾への増加傾向は、女性ほどには多くはないようであることを見ると、書道離れ傾向は、男性のほうに一層強いといえるようである。

低価格毛筆の需要不振

注目すべき記事が、昭和五十六年（一九八一）二月十二日付けの『中国新聞』に載っている。その記事によると、一一業者の倒産したその原因の一つに「筆ペン」の出回りがあるとし、また一方に中国筆の増加をも指摘している。義務教育諸学校で使用される筆は、低価格のものが多い。中国輸入の筆に対抗できるほどの生産工程等の機械化による生産コスト削減への努力も必要である。筆で書いた味わいが存すればよいとする筆ペンに対抗するためには、本物の感触をもつ「万年筆（ふで）」というような、新製品開発への工夫も必要となる。このためには、穂先の構造のみならず、墨タンク、墨汁の粘度等、相当額の研究投資が必要となるかもしれない。

書道愛好家への配慮

毛筆離れという現象は、以上のように低価格品について急激に生じつつある。一方、日常の生活からの離脱を好む風潮に伴って、芸術性をもった書道人口の増加化傾向がうかがえる。日本の人口における老年層の増加、またそれらの老人層の余暇活動の一つに、伝統書道のみならず前衛

書道も好まれつつある。これらの書道好みの人々には、高価格品とはいえないまでも、中価格品の需要が生じているということはいうまでもない。ところで、これらの伝統書道習得者層の形成は、かつての義務教育諸学校での習字学習に起因することを忘れてはならない。熊野筆の将来を中価格品以上の生産を目標とするにしても、幼少時からの習字教育への積極的なかかわりを、毛筆業界全体として持つべきであろう。

芸術書道愛好家は、数多くの書道会派の指導者たちによって、現在なお拡大されつつある。しかし、それは、すべて書道指導者にのみ任されていて、毛筆業界、製墨業界、和紙業界等、いわゆる文房四宝の業界の参与はない。各県の適当な場所に、書道会館があり、よい作品にふれ、またすぐれた書家の指導をうけ、さらに書道愛好家の増加を企るという便宜があるとどうであろう。書道人口の増加を一層見込みうる。ピアノ販売は、ピアノ指導によって拡大された。毛筆業界にもある程度の、書道指導への配慮がなされてしかるべきである。そのためには、業界の経営規模の問題として、ある程度の協業化も考えられるべきであろう。

新分野への開拓

毛筆製造の方法を画筆に、さらに化粧用品にと拡大してきた方向は、戦後の毛筆業における方向として正しかった。しかし、この方向は、賃金の安い発展途上国に、その生産を奪われる傾向もなくはない。そのためには、機械化とともに、自社ブランドによる高級品化の道をたどる必要があろう。毛筆も、低価格品からの離脱によって、自社ブランド販売の傾向が強まっている。この傾向と同一の方向をたどる必要がある。

さらに、毛あしらいの巧みさによる新分野への開拓も必要である。たとえば、高級アクセサリーとして、帽子飾りやブローチ状のものを工夫する等のことである。このような試行錯誤が、業界の発展を支えることになる。

使用者啓蒙と毛筆規格の統一

昭和五十七年（一九八二）十一月一日、『朝日新聞』に載った全面広告は注目するものであった。この企画が、熊野毛筆業者によって起こされたものでないにしても、熊野筆の名を高からしめた。企画会社は、東京都中央区銀座にある「草土社　和筆特選頒布会」である。その見出しは、大見出しとして「心を伝える日本の伝統工芸筆」とある。小見出しは「選びぬいた書道用筆の二大産地広島・豊橋の逸品」である。さらに、説明を読むと、「日本を代表するのが熊野筆（広島県）と豊橋筆（愛知県）」とある。この広告で注目されるのは、次の諸点である。

1　十二の販売品目録をあげ、そのうちの八種について用途を明示している。

初心者用筆
仮名筆　仮名用筆
揩書用筆　行書用筆　草書用筆
写経用筆
書簡用筆

この八種の区別は、筆の選定に当たっての初心者である書道愛好者への配慮が見られる。

2　十二のうち、次の四つは、書道の中級者用への配慮がある。

鼬毛筆
白狸・純鼬毛筆
純羊毫細光鋒筆（中鋒）
純羊毫細光鋒筆（長鋒）

これらの名称について、それぞれにどのような筆であるかの説明を加えている。

3　それぞれの製品に、毛の種類、軸の大きさと色合、骨の有無等の説明も加えてある。

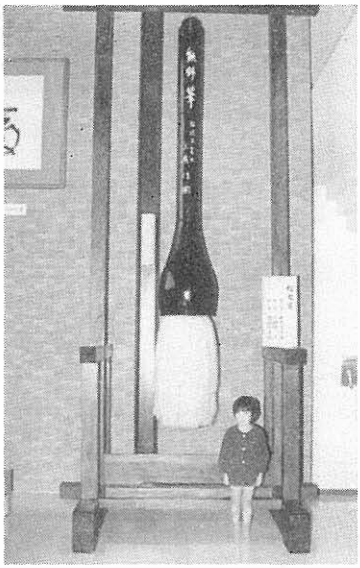
以上の広告から、毛筆に求められているものが何かということがわかる。すなわち、どのような筆を用いれば、自ら書きたい作品ができるかを明示してほしい、どのような製品かの説明がほしい、ということである。すなわち、毛筆の製品としての規格が、多くの人々に求められているということである。業界を通しての製品の規格化が製品価格をも安定させることになるのではないかと考えさせられる。

この広告のもっている内容、すなわち毛筆の規格等が製造業者にとって、ごく一般的な知識であることはいうまでもない。しかし、それが世間一般に通用している知識でないことを知らなくてはならないであろう。毛筆についての知識を、業界こぞって広めていくことこそが、製品の規格化を促進させ、製品への信頼性を高めることになると思われる。朝日新聞のこの広告のもつ啓蒙性について今後考慮してほしいというわけである。

将来計画への模索

毛筆業界の将来は、業界全員が、将来を見すえて日々努力する以外に発展はない。そのためには、いくつかの将来計画を模索する必要があろう。その模索への努力こそが、熊野筆の将来を明るいものとするはずである。

図7—4—16　筆会館毛筆展示室



穂の直径　50㎝　穂の重量　50kg
穂の長さ　1.1m　軸の重量　70kg
軸の長さ　2.4m　筆の重量　120kg
筆の全長　3.5m

図7—4—17　日本一の大筆（町民会館）

そのほか、町民会館にも書の展示、日本一の大筆等の展示もなされている。町民の社会教育のみならず、近隣の市町村への筆に関する啓蒙啓発の中心となっているのである。

以上のような諸活動が、前項の全国書画展覧会の活動などとともに、熊野町の町ぐるみでなされているものである。筆の町という、地場産業へ目を向けた教育への取り組みは、他に類例を見ないものであると評価してよかろう。

3　筆塚と筆供養

筆塚は、昭和四十九年（一九七四）の、筆祭りに合わせて除幕された。「筆塚」という揮毫は、内閣総理大臣で

図7－4－18　筆塚（中溝区）

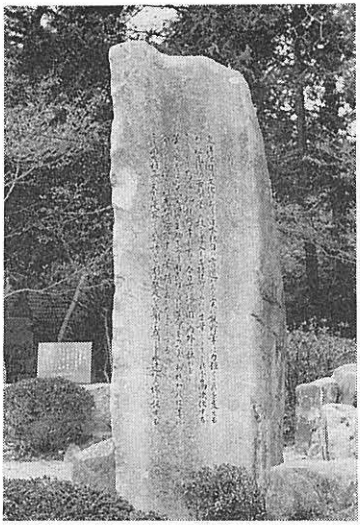


図7－4－19　筆塚趣意碑（中溝区）

あった故池田勇人の筆である。その際、広島県書画筆事業協同組合（現在の熊野筆事業協同組合の前身である機関）や毛筆業者が中心となって、熊野町などの協力をえたうえで、榊山神社の境内に建立している。

筆祭りは、まず、筆塚に対して、榊山神社の宮司による筆供養の神事が行われてから、開始される。続いて、毛筆製造業者および永年勤続者の表彰会が行われる。また筆塚の傍にしつらえてある筆焼きがまの火に、使用ずみの筆を投じ、筆供養がなされる。筆供養は、筆が動物の毛を利用して作ったものであるため、それらの諸動物を供養するとともに、多くの人々に供されて使い果たされた筆に対する感謝の気持をこめて行われるものである。

筆塚の前では、町内における伝統工芸士などの優秀な毛筆製造技術を保持している人によって、毛筆製造実演が行われる。実演は、三〇分間程度、一日二回行われる例が多い。筆造りの実際を見聞したことのない、熊野町以外の人々にとっては、この実演は最も興味をもたれている催物のようである。

図7—4—20　小野道風奉讃之碑（中溝区）

図7—4—21　寿草奉詠之碑（中溝区）

以上のように、筆塚は、毛筆事業の発展を祈念するための象徴となっているとともに、筆祭り行事の中で、中心的位置にあるものとなっている。

なお、この筆塚の周りには、書家として古来著名である、「小野道風奉賛之碑」があり、「一篇詩」と題する漢詩を刻している。また、「寿草奉詠」と記した歌碑もある。これには、和歌一首を刻している。ちなみに、その和歌を紹介すれば、次のとおりである。

〈たふとしノ誤記〉
もろひとのめぐみとおとし筆塚を
われつゝしみてとはにつたへん

この和歌に詠じられているように、筆塚を人々は永くいつくしみつつあるわけである。

4　筆祭

筆祭の行事は、熊野商工会設立十周年に当たって、昭和十年（一九三五）九月二十四日、第一回が開催された。筆祭りは、日本三筆の一人とされ、また自ら筆を造られたという嵯峨天皇をしのび、あわせて熊野町製筆の元祖とされる井上治平、音丸常太の二氏の功労を感謝する意をこめて行われることになった。また、同時に、毛筆業業者たちの毛筆製造に対する精神を、氏神の前で祈念する気持も込められている。第一回以後、現在まで、毎年彼岸の中日に行われている。

図7―4―22　筆祭りチラシの一例

筆祭には、町の東西から二艘の彼岸船が子どもたちによって引かれ、町内を練り歩く。また、榊山神社前の一万本の筆通りを通り抜けると、境内では祭典が行われる。神社下の筆塚では筆供養もある。毛筆製造の実演、即売会、大書会、筆供養など多彩な行事が行われる。そのほか、学校では競書大会も行われる。このため、町内のみならず、安芸地方から多数の観光客が来熊している。

筆祭り行事は、今後さらに継続発展させられ

筆祭り御案内

日　　時　9月23日（水）「秋分の日」
会　　場　安芸郡熊野町中溝
　　榊山神社
　　熊野中学校

筆祭り祭典	9：00	榊山神社
筆供養	10：00	榊山神社境内筆塚
競書大会（一部）	8：30	熊野中学校
（二部）	10：30	〃
筆まつり野球大会	8：00	熊野中学校グランド
彼岸船……東コース	新宮出発8：30	初神～城之堀～萩原～中溝～榊山神社
西コース	第3小学校出発8：30	団地～川角～出来庭～呉地～榊山神社
熊野町音楽同好会コンサート	12：15	榊山神社境内
筆おどり	13：00	〃
芸能発表	13：30	〃
チャリティバザール	13：50	〃
筆製造実演	10：00	
筆の市	～16：00	筆塚前
売店・ふるさと電話コーナー	10：00～16：00	榊山神社境内
1万本筆通り	10：00～16：00	〃　参道
錦鯉品評会	10：00～16：00	町営プール

使用済の「筆」を持参して下さい。筆供養をします。
送付先　広島県安芸郡熊野町3662―2
主　催　熊野町商工会・商工会青年部

図7―4―23　筆祭り町内案内用チラシの一例

図7—4—24　1万本の筆通り（その1）

図7—4—25　一万本の筆通り（その2）

なくてはなるまい。また、さらに広範囲に宣伝される必要もあろうかと思われる。

ところで、筆祭り当日の筆踊りは、中でも人の目を引いている。昭和十年（一九三五）に、野口雨情によって作詩され、藤井清水によって作曲された「筆まつり」の曲に合わせて、馬場豊寿鶴の振付による婦人会員の筆踊りが行われる。その歌詞、楽譜、振付は、後に示すとおりである。なお、現在販売されているレコードは、昭和五十四年（一九七九）十一月に、東芝ＥＭＩ株式会社によって製造されたものである。唄はⒶ浜田喜一・Ⓑ巻口成子、演奏は東芝レコーディング・オーケストラ、はやしは浜田社中、編曲は山中博によるものである。なおこのレコードが出されるに当たっては、熊野町青年連合会が主体となって企画し、熊野町、熊野町教育委員会、熊野町商工会、熊野筆事業協同組合、熊野町金融懇談会が協賛して、初めて完成したものである。

図7—4—30
筆まつり

作詞：野口雨情
作曲：藤井清水

※一、筆の都よ　サッコリャサ
熊野の町は（ハ、エイサカセ）
姉も妹も筆造る　ソリャ
姉も妹も　ハ、ヤントナ
第四節　熊野筆の特色とこれから
筆造る。
※一、九十九段の　サッコリャサ
石段のぼりや（ハ、エイサカセ）
上にゃ大杉八幡宮　ソリャ
上にゃ大杉　ハ、ヤントナ
八幡宮。
一、秋の雨さへ　サッコリャサ
光教坊の銀杏（イチョウ）は（ハ、エイサカセ）

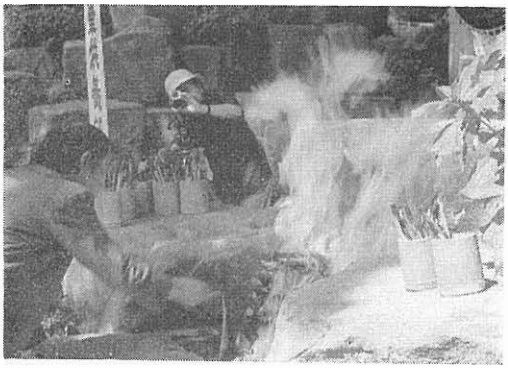


図7—4—26　筆　供　養

図7—4—27　筆祭りにおける大書

第七章　熊野の筆

黄金交りの色に降る　ソリャ
黄金交りの　ハ、ヤントナ
色に降る。

※一、筆は七十　サッコリャサ
三度も変る（ハ、エイサカセ）
咲いた紫陽花　ただ七度　ソリャ
咲いた紫陽花　ハ、ヤントナ
ただ七度。

※一、熊野筆屋の　サッコリャサ
筆司の唄は（ハ、エイサカセ）
山の木萱も聞きゃなびく　ソリャ
山の木萱も　ハ、ヤントナ
聞きゃなびく。

一、誰を待つやら　サッコリャサ
大年さまあたり（ハ、エイサカセ）
秋の夜長を虫が啼く　ソリャ
秋の夜長を　ハ、ヤントナ
虫が啼く。

※一、毛もみゃ楽でも　サッコリャサ
恰好づけゃ出来ぬ（ハ、エンサカセ）
筆司ァ見たよな楽じゃない　ソリャ
筆司ァ見たよな　ハ、ヤントナ
楽じゃない。

一、砂橋下　サッコリャサ
流れる水は（ハ、エイサカセ）
末にゃ二河の滝となる　ソリャ
末にゃ二河の　ハ、ヤントナ
滝となる。

※一、人に隠して　サッコリャサ
書くたよりさへ（ハ、エイサカセ）
筆の命毛にゃ隠されぬ　ソリャ
筆の命毛にゃ　ハ、ヤントナ
隠されぬ。

一、登岐の城から　サッコリャサ
夕べの月も（ハ、エイサカセ）
出ては夜明けにゃ山の端にソリャ
出ては夜明けにゃ　ハ、ヤントナ
山の端に。

一、熊野鶴ケ釋　サッコリャサ
一つの田から（ハ、エイサカセ）

水は分れて西東　ソリャ
水は分れて　ハ、ヤントナ
西東。
※一、忘れなさるな　サッコリャサ
堀の城山の（ハ、エイサカセ）
下は熊野の筆どころ　ソリャ
下は熊野の　ハ、ヤントナ
筆どころ。
一、ゆるぎ観音　サッコリャサ
ゆるがしやゆるる（ハ、エイサカセ）
根なし岩だが落ちはせぬ　ソリャ
根なし岩だが　ハ、ヤントナ
落ちはせぬ。
※一、迷ちゃならない　サッコリャサ
追分の松を（ハ、エイサカセ）
筆の熊野の目じるしに　ソリャ
筆の熊野の　ハ、ヤントナ
目じるしに。
一、女神さまでも　サッコリャサ
大明神は（ハ、エイサカセ）
新宮氏子のまもり神　ソリャ
新宮氏子の　ハ、ヤントナ
まもり神。
一、緑色よい　サッコリャサ
西光寺の庭の（ハ、エイサカセ）
松に松風たえやせぬ　ソリャ
松に松風　ハ、ヤントナ
たえやせぬ。
一、夏の涼みは　サッコリャサ
お釈迦の森よ（ハ、エイサカセ）
清き流れに河鹿啼く　ソリャ
清き流れに　ハ、ヤントナ
河鹿啼く。
（※印以外は唄われていない）

図7—4—29　レコード盤

図7—4—28　筆祭り唄のレコードジャケット

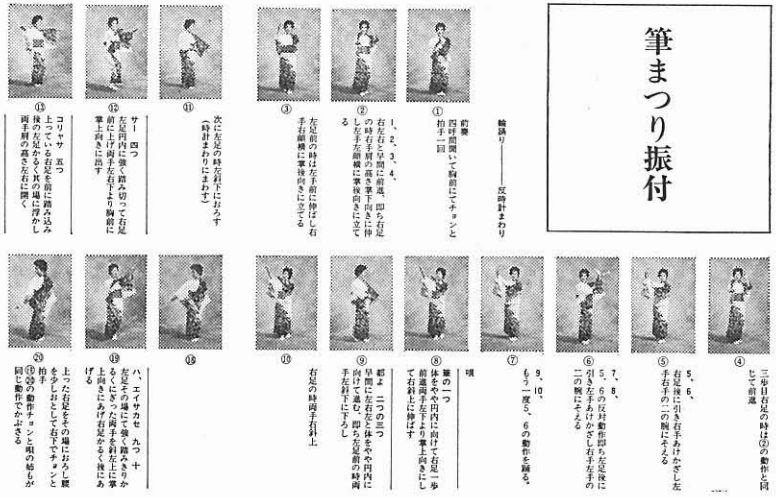
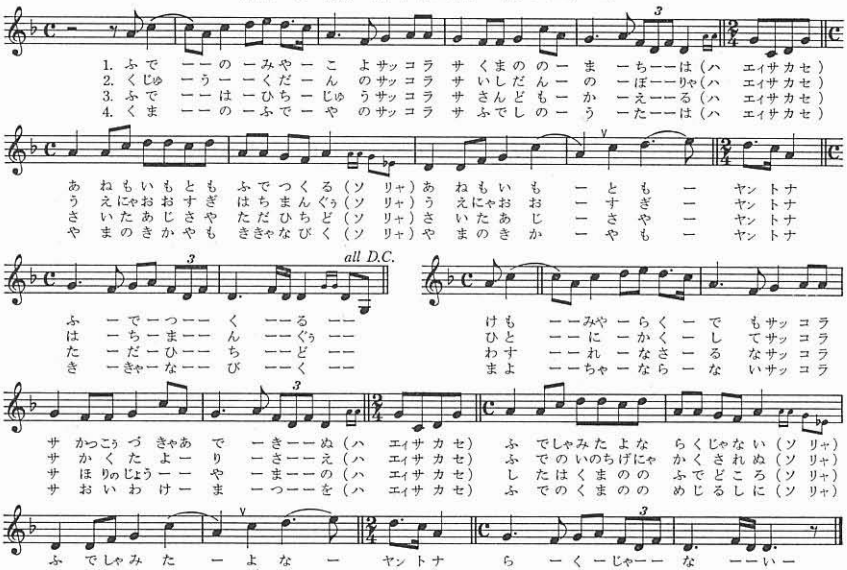


図7—4—30　筆祭り歌の振付

作詞：野口雨情　作曲：藤井清水　編曲：山中　博


1. で ーーの ーみや ーこん よッッコララ サくましのだし のんーまーち ーーは（ハ エイサカセ）
2. ふじゅで ーうーーひち ーーじゅ ッッコ ましんで くいさふ ーぼーーりゃ（ハ エイサカセ）
3. ふくふく ーーはの ーーふで ーーや うの ッッコ サササ ーのもの ーーえーーる（ハ エイサカセ）
4. あうさや もぎやも とすさやも ふはたき ぎゃ つまひな ぐ ぐんちび （ソソソ リリリ）あうさや ねえいま もおじか ーとすさやも ーーヤントトナ
ねえいま もにたの いおあき ぐ ぐどく （ソソソ リリリ）ねえいま もにたの いおあき ーーヤントトナナ
all D.C.
ふはたき ーでちーつまーくんーーるーーぐーーちーだーひーーちーーどーーきーぎーびーーくーーもとすよ ーーみやーらくくさらーーでしるなーもてないサッコ ララ
けわま ーーれーーなーーちゃーーけーーー

五　熊野筆の特色

二つの見方

一つの物について、その特色を述べようとすると、必ず二面からの考察を必要とする。すなわち、物そのものの特色について、まずは述べるべきであるということが挙げられる。次いで、その物の製作過程に見られる特色について述べるべきであるということになる。特に、製作される物が、質的なよさあるいは経済的価値を有している場合には、その製作過程が重要な問題となる。筆という物に、そのような二面からの考察を加えることによって、その特色を明らかにするものであることはいうまでもないところである。

筆そのものとしての特色

熊野町で生産される筆が、特色をもっているということは、どういうことを意味するであろうか。それは、熊野筆が、他の産地の筆に比べて、何らかの特異性を保持しているということになる。同一価格で販売される筆が、産地によって品質が極端に異なる場合、質的によくない生産地の筆は、売れなくなってしまう。それに対して、わずかでも安価であれば、それは多量に販売されることになる。薄利多売ということは、価格の安さと製品の質が一定のレベルを保っているということに支えられる、販売行為なのである。昭和五十四年（一九七九）における書道用の熊野筆は、全国生産量の八〇％を占めている（第七章第三節二の2「944ページ」参照）。そのうえ、平均生産単価は、川尻筆、豊橋筆、奈良筆に対して相当に低いことも注目される「945ページ」参照。このことは、熊野筆が、同一の品質の他の生産地の筆に対して、低額であることを意味している。それ故に、その生産高が八〇％を占めているということになっているのである。

もし、熊野筆が、品質以外のうえで、特異性をもち、その点で熊野筆の特色が挙げられるとするならば、熊野

筆は販路を閉ざされたであろう。それ故、熊野筆が、筆そのものとしての特色をもつとはいえないといえることになる。

低価格保持の原因

熊野筆が低価格を保持できたのは、何故であろうか。戦前において、特に毛筆製造過程において機械化されていなかった時代においても、低価格の生産に長じていた。羊毛その他の原料も、熊野町では生産されていない。にもかかわらず、低価格を保持できたのは、人的要因にあったとしかいいようがない。その要因を、以下にとりまとめてみると、次のようになろうか。

① 女性中心の毛筆製造職人

昭和十年、野口雨情に依頼して、筆造りの歌を作った。雨情は、来熊したうえで、作詞したようである。その詞の一節に、「姉も妹も筆作る、ソリャ、姉も妹も、ハ、ヤントナ、筆作る」と歌う。この作詞に際して、いわゆる各生産者の「ショクバ（職工の仕事場）」を見たに違いないし、また町の毛筆業者から毛筆生産職人の多くが若い女性によって支えられていたということをも教えられていたに違いない。そのうえで、この一節を読むと実に興味がある。すなわち、「父も兄も」筆造りに従事している姿が歌われていないということである。そのことは、786、787ページの図7—2—51、図7—2—52「熊野筆従業者雇用状況(1)(2)」を見てもわかるとおりである。明治以来、三五%前後が男性で、他は女性である。川尻町や広島市の場合と比べると、男子の比率は、半分以下である。熊野町では、女性が毛筆生産の主体なのである。豊橋市の場合を、筆者が同市の業者に問い合わせてみたところ、男子が中心であるという。第二次世界大戦後しばらくまで見られた、若者のいわゆる夜遊び（夜這い）においても、六畳程度の「ショクバ」に、若い男性たちが訪ね、談笑している光景がよく見られた。これは、女性が筆造りの中心であったことをよく示している。もし男性が中心であるなら、内職型の生産形態は成立しえなかった

のではなかろうか。女性中心であることは、毛筆需要の乏しい時期に、彼女たちは潜在的失業者たりえた。景気の高暢期にはまた生産者へ直ちに戻ることを可能にしたのである。生産の縮小と拡大の安全弁として、女性の労働力は適応している。これは、女性の労働力が、大規模企業における下請業者的働きと同様の働きをしていたと考えられるのである。いいかえれば、女性労働力が経済変動に対する柔構造を形成していたといえるのである。

②　大量生産化

多くの女性が、目の前で相当額の収入をえているのを見ると、さらに新たに生産職人への参入を図る女性が生まれてくることになる。毛筆生産が拡大し、町ぐるみで行われるようになると、その傾向は、雪崩のように加速したと思われる。山村の一盆地であるだけに、町ぐるみという傾向は、急速に進行したであろう。

多くの人が生産職人になると、筆の大量生産が行われるようになる。それも、高級品ではなく、中級品以下の製品において、大量生産が行われるようになっているのである。このことが、熊野筆の平均単価を豊橋筆、奈良筆に比べて二～三割近く低くしている原因とも考えられる。

熊野筆の安価、大量生産を評して、豊橋市や奈良市の業者たちは、「熊野筆は盆混ぜをするため高級品ができない」という。この批評は熊野町の生産工程を見ると、誤解であることはいうまでもない。熊野において盆混ぜが行われているのは、面相筆に限られている。大量生産で、適度な品質のものを生産している熊野筆に対して、他の産地の人々の誤解が生じたのも、当然といわなければなるまい。

③　毛筆生産への親近性

毛筆生産は、家内工業の最たるものである。機械を多く用いるわけでもないし、複雑すぎるというほどの工程があるわけでもない。毛筆生産を、目の前で見、さらに聞き、時にはその工程の一部を試行してみるのに容易な

産業であるといえる。一町に、相当量の職工数が存在するようになるとともに、生産技術の伝授が、容易となることはいうまでもない。人々の毛筆生産への親しみと慣れは、熊野町の地理的条件と相まって、醸成されたといってよかろう。

さらに、目の前で毛筆生産に従事している人物は、姉などの女性である。幼い者にも毛筆への親近性が生じるのはいうまでもない。女性のやさしさに毎日接する場面が毛筆生産の場であればあるほどに、技術習得は早いと考えられる。穂首を作る指先の感触も、このようにして早期に形成されたであろう。そのため、熊野町では、生産技術者が極度に不足するということも避けられたわけである。

④ 簡単な設備と道具

毛筆生産には、大規模な設備は不要である。毛揉みの段階で、炭を利用するための配慮さえすれば、どんな部屋でも生産できる。小机(台)と小物、さらに少々の空間、それも三畳くらいあれば可能である。農家において、それほどの空間と、台、小物等を用意することは、大きな出費にはならない。農家の副業として、誠に適合しているわけである。製品の低価格が維持できたのも、主たる生活費を形成する農業に対して、大きく影響しなかったということがあったからである。

⑤ 農作業と毛筆生産

家内工業であり、そのうえ分業化しているとはいえ、筆の主要部である穂首生産が一人の技術者によって可能である筆造りは、副業として好都合なものであった。農繁期には、一時筆造りを休み、農作業に従事し、農閑期に筆造りに精を出すことを可能にした。

電灯が普及した大正中期以降は、夜なべ仕事としての筆造りを、一層促進することになった。このことは、熊

野町の各農家の保有する田地が大規模でなく、畑地も僅かであること、さらに山林の生産量が極端に乏しいという地域の特性に誠に適合したものであった。大規模農家が多ければ、副業も発達しなかったと思われる。

さらに、残毛が田圃に入れられると、それは金肥以上の肥料的効果をもっている。残毛の捨て所は、肥料の節約をも可能にしているのである。

農業を圧迫しないで、農業とともに成り立ち、相当額の収入を可能にする筆造りが、盆地の農業地域に発達していく基本的条件として、以上のような点が存したかと考えられる。

高価格品と熟練技術者

低価格品の生産が、熊野筆の全国的シェアを獲得するうえで、大きな力となったことはいうまでもない。低価格品が、能野筆の生産額を向上させたのである。ところが、一方高価格品が生産されなかったかというと、そうではない。そのことは、「佐々木為次先生碑」において為次が攝津有馬より毛筆製造技術を修得してきたとあること、「熊野毛筆元祖頌徳之碑」において井上治平が広島市研屋町の浅野家御用筆吉田清蔵について製法を学んだこと、また音丸常太も攝津有馬から学んで帰郷していること、この三点を見てもわかるとおりである。他の毛筆産地では、現在でも男性中心に筆造りが行われている。男性中心であるということは、職業としての専業化につながっていく。日本社会では、久しく男性が家計のための収入を得る中心人物としての地位を与えられていたからである。そのため、衣食など、じゅうぶんに女性によっても可能であった職種でさえ、男性が参入し、専業化することによって、製品としての完成度を高めていったという歴史がある。筆造りにおいても、そのことは同一の史的変遷を経過してきたことは、熊野以外の生産地で男性中心の筆造りが行われていることを見れば、了察しうるところである。

熊野町において、筆造り法を伝達した人々が男性であったこと、このことは高級品製作への方向を示唆してい